

# 木村定三著作集補遺

石崎 尚 (編)

凡例

- 一、『愛知県美術館 研究紀要第二十六号 木村定三コレクション編』にて「木村定三著作集」を掲載した。その後、新たに見つかった木村定三の自筆文献を収録したものがこの「木村定三著作集補遺」である。基本的な凡例は「木村定三著作集」を踏襲しているのので、そちらを参照されたい。
- 二、文献の通し番号は「木村定三著作集」を引き継ぎ、「二二〇」から始める。
- 三、文中の明らかな誤字は修正した。

## 二二〇 コレクター放談

孝一さんとは一〇年程前に、氏が丸栄デパートで皿や花瓶、灰皿、とほけた置物等の個展をしていた時に会場で知り合い、飄々としたその人柄が気に入って、爾来淡々として且つ深いおつきあいをしている間柄であるが、その孝一さんが先日突然やってきて「今度丸善画廊でテラコッタの個展することになったが、その案内状に出す紙面に余白が出来て困っている。その穴埋めになんでも良いから書いて貰えないか」と私に執筆を求めた。

1 石崎尚(編)「木村定三著作集」『愛知県美術館 研究紀要第二十六号 木村定三コレクション編』愛知県美術館、二〇二〇年、001(126)～025(102)頁。

そもそも穴埋めということは、道路の穴埋めにしろ、破れ障子の穴埋めにしろ、鼠の壁穴の穴埋めにしろ、穴をふさぐ材料の良し悪しは余り問題にならない。とにかく埋っておれば多少なりとも役に立つのであるから、文章が悪文であろうが、その内容が一般の賛同を得られなからうが、一切おかまいなく軽い気持ちで引き受けた次第である。

書画骨董にしろ切手や石ころや蕎麦猪口にしろ何んでもそれ一筋に三〇年ぐらゐ集めていると、世間ではその人を一応コレクターというようになる。筆者もその一人で展覧会の会場などで、作者や主催者からその作品の批評を求められることがよくある。そうゆう場合に、うそを云えず正直な筆者は甚だ困るのである。先づ本心から褒めることのできる作品に出合うことは、雨夜に星を見いだす程に稀である。絵の場合には大抵第一印象は、「あー汚したなあー」というのが実感である。何も描いてなければずい分白くてきれいな紙や絹で、もし優れた画家が使用したなら如何様に優れた作品ができたかも知れないのに、こんなに汚されてはなんともかんとも勿体ない次第である。本人の時間と労力の浪費は問はないとしても、物資の消耗は国家の損失であると思う。焼物の場合も同じことで、大抵の場合の印象は「あーがちがちに土を固めたなあー」と思うことが多い。

作家は物資を消耗するのでなく、価値を生み出さなければいけない。価値を生み出すとは対象物のところ(核心)を掴んで表現することである。それがたとへば花の絵ならば、実物の花以上の感銘を見る人に与えなければならぬ。実物の花そっくりに描けているぐらいならば、花屋へ行けば一本千円もする切花はまづ無いから、絵が千円の花以上の値段がするのは不合理である。しかし優れた画家が花のところを掴んで絵にした場合には、それを見る人は実物の花を見た時には感じとれなかつた花のころをその絵を見ることによって感ずることが出来て大なる感銘を受けるのである。そうやって初めて画家は価値を生み出したといえるのである。ころをとらえることの出来ない画家は、プロ、アマを通じて物資の消耗となるから絵を描くことは止めて唯自然を深く観察するだ

けに止めて貰いたい。

次に名古屋在住の一コレクターとして筆者がいつも期待を持って初日から見に行く展覧会は、オリエンタル百貨店の上田恒次の白磁展、片野元彦のしほり展、丸栄デパートの志村ふくみの手織の絨展、フォルム画廊の香月泰男、尾崎良二の個展等である。

さてこれから肝腎の孝一さんのテラコッタ作品の推奨文を書く筈の処だが、穴埋めの原稿枚数はすでに予定を超過しそうで、これ以上統けると穴を埋めすぎて盛り山になり、交通の妨害となりそうなので、筆者は孝一さんのテラコッタをすでに百点近く所蔵していることを報告してこの穴埋めの文章を終りとする。

〔加藤孝一テラコッタ作品個展〕案内状、一九六九年、ノンブルなし

## 〔二一〕 窯変幻想伊賀

今井康人。従前は「ヤスト」と呼んでいたが、現在は「コウジン」と呼ぶ。私が彼を知ってからも十数年になるが、彼は昭和十二年の生まれであるから現在五十六歳の働き盛りで、その人柄は純粹にして誠実、勉強心の旺盛な礼儀正しい人物である。彼は若い頃、五年間ほど師匠について学んだが、その後、独学で制作し現在に到っている。

私は、彼の作品には桃山時代の伊賀・信楽・備前の名品の模倣ではない独自の造形の厳しさがあふれることに感心して、数年前から積極的に彼を後援している。凡そ焼物の場合、造形の良否は、総て作者の責任であり、窯出し後の出来はえの良否は、火の神様の思召しによるものである。したがって、造形が悪いならば初めからその作品は零である。

処で、桃山時代から現在まで、李朝、高麗の侘び、寂びに徹した名茶盃に比肩すべき作陶の第一人者は、今は故人の小山富士夫さんと私は思うが、その一盃の制作時間は、凡らくは一分間以内と考えられる。私は、彼に従前より小山さんの作陶の制作態度を学べと助言していたが、漸く

現在では、彼も一分間程で一盃を仕上げるようになってきた。

そのことにより、彼の作品は、もともと火と灰が微妙に作用して、茶盃にせよ水指にせよ花生にせよ、変化に富んだ幻想的な景色を呈していたが、尚その上に一段と力強さが加わって、豪放雄大な感銘を与えるようになった。更に数年前から神秘的な紫色や薄青色の発色を呈する作品が現れたことは、多年の彼の努力に対する火神の恩賞であると思う。

尚、今回の三越展の大壺の三点からは、世界のヘビー級ボクサーから受けるような重厚剛直な迫力を感じる。

今井さんよ今後一層努力せよ。

平成五年十一月記

〔今井康人作陶展〕株式会社三越、一九九三年、ノンブルなし

愛知県美術館研究紀要 第31号 木村定三コレクション編

2025年3月発行

編集・発行 愛知芸術文化センター 愛知県美術館

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2

Tel: 052-971-5511 (代)

<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/>

The logo for AOMOA (Aichi Prefectural Museum of Art) features the lowercase letters 'aomoa' in a stylized, rounded font. Below the letters, the full name 'aichi prefectural museum of art' is written in a smaller, sans-serif font.

制作 共生印刷株式会社

Bulletin of the Aichi Prefectural Museum of Art No.31

Part2 Studies of The Kimura Teizo collection

2025

Edited and Published : Aichi Prefectural Museum of Art

1-13-2 Higashisakura, Higashi-ku, Nagoya 461-8525 Japan

Tel: +81-52-971-5511

Printed : Kyosei Printing Co., Ltd.